

「竹下通りから右へ！」

伊藤 優

春休みに閑散とした原宿に降り立ったミミコは、あまりの原宿の廃れぶりに驚愕する。ミミコは驚きながらも、原宿に来た大きな目的の一つであるベリーキヤンドル（洋服屋）でのお買い物しようと呼びを進める。しかし、ベリーキヤンドルに到着したミミコの目に飛び込んできたのは、閉店のお知らせという紙だった。落胆するミミコの隣で、同じように膝から崩れ落ちて落胆しているサカキの姿を見つめる。サカキは閉店の貼り紙を剥がし、ぐしゃぐしゃに丸めて床に捨てる。それを見たミミコは怒り、ミミコとサカキは揉み合いの喧嘩をする。そこへ警察官のキムラがやってきて、ミミコたちの喧嘩を仲裁する。それからミミコとサカキ、キムラはベリーキヤンドル好きという共通点もあり、意気投合し、元の原宿を取り戻すために動きだす。その一方で、新大久保サラムと名乗るインフルエンサー集団は、原宿を完全制圧しようとして動き出すも、新大久保サラムのリーダー、トコチャの父がサカキであることがわかり、一時撤退する。新大久保サラムたちは、自分たちよりもSNSのフォロワーが多いミミコに勝つため、原宿制圧と新宿区をカルチャーにおいて一番有名な場所にすることを目標に掲げている新宿文化総本部に助けを求める。新大久保サラムたちに新宿文化総本部の総長シオリは、ミミコたちに決闘を申し込むよう言う。決闘当日、ミミコ達は竹下通りから決闘場までデモ行進を行い、周囲の注目を浴びる作戦を決行し、多くの人を引き連れ、決闘場にたどり着く。肝心の決闘は、元ヤクザだったサカキの凄みによって、ミミコたちの不戦勝となる。ミミコたちは、見物客たちを引き連れ、竹下通りまで再びデモ行進を行い、バスを構える。ミミコとキムラは、バズったときのお洋服販売の資金を元手に原宿に店を構える。和解したサカキとトコチャは、原宿に向かい、ミミコ達の店を見つめる。

登場人物

ミミコ (17) 高校生
サカキ (40) 会社員、トコチャの父
キムラ (17) (35) 警察官

友人1 (17) キムラの高校の頃の友人
友人2 (17) キムラの高校の頃の友人

トコチャ (17) 新大久保サラムリーダー、サカキの娘
メイチャ (16) 新大久保サラム所属メンバー
サケチャ (18) 新大久保サラム所属メンバー

シオリ (29) 新宿文化総本部総長、キャバ嬢
チョウコ (37) 新宿文化総本部所属、キャバ嬢
ゲンジ (30) 新宿文化総本部所属、ホスト

カエデ (40) ミミコの母

警察官

○竹下通り（昼）

人通りが全くなく、閑散としている。
通りのお店はほとんど閉まっている。

ミミコ（17）、ウサギをモチーフに
した服装で仁王立ちしている。

ミミコ「こんなの原宿じゃない！」

ミミコ、プリプリと怒りながら歩き始
める。

ミミコの背負っている鞆のウサギの耳
が、歩みに合わせてピョコピョコと跳
ねている。

ミミコ「ミミコが知ってる原宿は、もつとキ
ラキラしていてフワフワでいっぱいなのに
なんで今日に限って！ ミミコが原宿に来
る時に限って！ なんで原宿のお店、まっ
たく開いてないの！」

ミミコ、歩みを止める。

○ベリーキャンドルの前（昼）

シャッターが閉まっている。

ミミコ「え」

シャツターに紙が貼られており『長年のご愛顧を賜りありがとうございます』と書かれています。私共ベリーキャンドルは、10月31日をもちまして、閉店いたしました』と書かれています。

ミミコ「そんな」

ミミコ、うなだれる。

ベリーキャンドルの服に身を包んだサカキ(40)の足音が、ミミコの近くで止まる。

ミミコ「ベリーキャンドルう、ミミコの青春を返せ」

サカキ「クソおおおおおお！」

サカキ、シャツターから紙をはぎ取り、ぐちゃぐちゃに丸めて地面に叩きつける。

ミミコ「え」

サカキ「ん」

ミミコとサカキ、視線を合わせる。

ミミコ「でも、これは、ミミコのもの！」

ミミコ、丸まった紙を手で伸ばす。

サカキ「それなら、私も欲しいです！」

ミミコ「ミミコの！」

サカキ「私の！」

ミミコとサカキ、取っ組み合いの喧嘩になる。

ミミコ「ベリーキャンドルのお洋服が伸びちやうでしょ」

サカキ「もう買えないんだからやめてくださいよ！」

ミミコ「むうううううう」

サカキ「もおおおおお」

紙がミミコの手を離れ、飛んでいく。

ミミコ「あ！」

サカキ「あ！」

ミミコとサカキ、飛んでいく紙を追いかける。

ミミコ「待って！」

サカキ「待て！」

曲がり角から笛を吹く音が聞こえる。

ミミコ「え？」

サカキ「なに？」

曲がり角からキムラ（35）、笛を吹
きながら、走ってくる。

ミミコ「ごめん、ミミコ逃げる」

サカキ「待ってよ」

ミミコ、走り出す。

ミミコ「ミミコ、少年院は嫌だ！」

サカキ「私もムシヨ暮らしは嫌です！」

ミミコ「ついてこないでよおお！」

サカキ「助けてええ！」

キムラ「その二人、止まりなさい！」

キムラ、笛を吹いて、二人を追いかけ
ていく。

○交番（昼）

サカキとミミコ、座っている。

目の前には、キムラ。

キムラ「本当に、紙を奪い合ってただけな

の？」

ミミコ「はい」

キムラ「そちらは？」

サカキ「そうです」

キムラ「わかりました。身分証明書はありますか？」

ミミコとサカキ、身分証明書を出す。

キムラ、パソコンに打ち込み始める。

サカキとミミコ、お互いの身分証を盗

み見て、指を折り数える。

サカキ「17歳」

ミミコ「40歳」

キムラ「なんで年齢数えたんですか？ 榊さん」

サカキ「と、特に理由はないんですが」

キムラ「本当に？」

ミミコ「神に似てるね」

キムラ「え？」

サカキとキムラ、ミミコを見る。

ミミコ「ほら、ここ」

ミミコ、サカキの身分証明書を指さし

ミミコ「神っぽい」

サカキ「あり、がと、う？」

キムラ、吹き出す。

ミミコ「なんかおかしいこと言った？」

キムラ「若いっていいなって、思ったわ」

ミミコ「大人って、みんなそう言うよね」

キムラ「そりゃそうよ、もう戻れないんだか

ら

ミミコ「でも、キムラさんもあれでしょ？」

あったでしょ？ ミミコくらいの時」

○（キムラの回想）竹下通り（昼）

友人1（17）、友人2（17）がキ

ムラを待っている。

キムラが原宿駅の方からミミコ達のよ

うな服を着てやってくる。

キムラ「お待たせ」

友人1「行こうか」

友人2「そうだね」

友人1と友人2、キムラから逃げるよ
うに去っていく。

キムラ「待ってよ」

キムラ、友人たちを追いかける。

○（キムラの回想あけて）交番（昼）

キムラ「待ちなさい」

ミミコとサカキ、抜き足差し足で交番
を出ようとしている。

ミミコ「あ」

サカキ「えへへ」

ミミコ「終わりじゃなかった？ キムラさん、
なんかどっか飛んでっちゃってたし」

キムラ「二人が着てるその服、ベリキャンで
しょ？」

ミミコ「そうなの」

サカキ「そうなんです！」

○（キムラの回想）キムラの家（昼）

キムラ（17）、服を脱ぎ捨て、膝を

抱え込む。

携帯電話を開き、ミクシイのようなサイトを見ている。サイト内のロリータ好き集まれ!というコミュニティのページを見て、笑顔を取り戻す。

携帯電話に『鷹高67期』のコミュニティの最新投稿の通知が来る。

キムラ、クリックをして開く。

ページには、キムラの写真が貼られて

おり、嘲笑の言葉が並んでいる。

キムラ、再びうずくまる。

○(キムラの回想あけて) 交番(昼)

キムラ、目に涙を浮かべている。

ミミコ「本当に! ベリーキャンドルのお洋服可愛いのにさ、なんで閉店なのとおおサカキ「やっとお気に入りのお洋服屋さん見つけたのにいいいい」

ミミコ「わかるよ、ベリーキャンドル通称ベリキャンのお洋服は全人類の憧れ!」

サカキ「もっと人類がベリキャンのすばらしさに早く気付くことができたら！」

キムラ「うおおおおお」

三人、泣いている。

○交番の前（夕方）

ミミコとサカキ、キムラに手を振り

ミミコ「キムラさん、またね！」

サカキ「ありがとうございます！ キムラさん！」

キムラ、交番のなかで手を振っている。

○竹下通り（夕方）

ミミコとサカキ、歩いている。

ミミコ「キムラさん、ベリキャン仲間だったんだね」

サカキ「うれしいですね」

ミミコ「ねえ、サカキ」

サカキ「ん？」

ミミコ「なにあれ」

ミミコ、ベリーキャンドルの方を指さす。

○ベリーキャンドルの前（夕方）

トコチャ（17）とメイチャ（16）、

サケチャ（18）が、韓国のおいしい

食べ物を食べながら、立っている。

トコチャ「ホトック、マシッソ」

メイチャ「チーズハットグ、マシッソ」

サケチャ「マツコリ、マシッソ」

ミミコとサカキ、物陰に隠れている。

トコチャ、スマートフォンを見て叫ぶ。

トコチャ「チンチャ？」

トコチャ、メイチャとサケチャにスマ

ートフォンの画面を見せる。

メイチャ「チンチャ？」

サケチャ「チンチャ？」

三人、走り出し、ミミコとサカキの前を全速力で駆け抜けていく。

ミミコとサカキ、周りを見渡し、ベリ

ーキャンドルの前へ行く。

ミミコ「あー！」

ミミコ、閉店のお知らせの紙が破られ、ケチャップがべったりついていてのを見つける。

サカキ「ああ」

ミミコ「最悪、あいつら！」

サカキ「本当にさっきの子たちなのかな」

ミミコ「ほら、見て」

ミミコ、トコチャ達が残していったゴミを指さす。

サカキ「どうしてこんなことを」

ミミコ「噂に聞いてた通り、最悪な奴らね」

サカキ「噂？」

ミミコ「知らないの？」

ミミコ、スマートフォンを取り出し、SNSのページを見せる。

ミミコ「見える？」

サカキ「まだ老眼じゃないですよ」

ミミコ「ごめん、ごめん。お母さん、もう老

眼始まつてるからさ」

サカキ「お母さんと同じ歳なのか」

ミミコ「もう! 友達が落ち込んでいると悲しいんだから、やめて!」

サカキ、『友達』という響きに静かに喜んでいる。

サカキ「おじさんなことで、気にならないんですか?」

ミミコ「なにが?」

サカキ「ふふふ」

ミミコ「なに? 気持ち悪い」

サカキ、少しだけ傷ついている。

ミミコ「見て? トコチャ、メイチャ、サケチャ率いる新大久保サラムたち」

ミミコのスマートフォン画面には、トコチャ達の写真。

サカキ「なんかおしゃれだね」

ミミコ「だよね」

サカキ「こういうのも着てみたい」

ミミコ「私も!」

サカキとミミコ「イエーイ！」

ミミコ「じゃなくて、ここ原宿から人がいなくなつたこと知ってるでしょ」

サカキ「そう言われれば、そうかもしれないですね」

竹下通りの方を振り返る。人がまばら。

ミミコ「そうなの！ 私が来るたびに人がいなくなっていくの。ずっと不思議だったんだけど、あいつらが絡んでいたのね」

サカキ「この子たち？」

ミミコ「そう！ 原宿の生命線だった古着屋をはじめ、クレール屋さんがどんどん閉店し、さらにはタピオカ屋さんも閉店！ そして私たちの」

二人「ベリキャンが閉店！」

ミミコ「全部、あいつらが手を回したのよ」

サカキ「みんな若い子たちだよ？ そこまでやりますかね？」

ミミコ「インフルエンサーだよ？」

サカキ「おしやれな人たち？」

ミミコ「そう、私なんか原宿に来るのが一か月に4回がやつとのド田舎人間なのに」

サカキ「私もそんなもんですよ」

ミミコ「はあ、どうすればいいんだろう」

K・POPのような音楽が、流れ出す。

サカキ「なんだ？ この音楽は」

ミミコ「まさか！ 5時のチャイムの音楽まで！」

頭を抱える二人。

サカキ「今日は帰りましようか」

ミミコ「新大久保に乗り込もうよ」

サカキ「ダメだよ。高校生、ですよね」

ミミコ「また、子ども扱い？」

サカキ「茨城？ 千葉？ 群馬？」

ミミコ「どうしたの？ 地名ばかり連呼して」

サカキ「いやいや、君の帰り道の心配してるんだよ」

ミミコ「あー、なるほど。というか君って言わないで、ミミコって呼んで、ちなみに茨

城!

サカキ「ごめん、ごめん」

ミミコ「わかりました。今日はサカキの言う通り帰ります」

○原宿駅（夜）

ミミコ「バイバイ！」

サカキ「さようなら」

ミミコ、改札を通り、サカキが見えなくなるまで手を振り続ける。

サカキ、ミミコが見えなくなり、新宿方面に歩き出す。

○サカキの家・玄関（夜）

スーツ姿のサカキ、帰宅。

サカキ「ただいま」

トコチャ、サカキの前を通り、立ち止まる。サカキのカバンを見ている。

サカキ、カバンからはみ出ているピンク色の布を隠す。

トコチャ、サカキの様子をジッと見た

後、自分の部屋に入る。

サカキ「トウコ」

部屋からはK・POPが聞こえる。

○ミミコの家・玄関（夜）

ミミコ、帰宅。

カエデ「ミミコ、なにしてたの？　こんな時間まで」

ミミコ「原宿行ってた」

カエデ「また学校さぼったの？」

ミミコ「春休みだってば」

カエデ「今年受験でしょ」

ミミコ「春休みなのに」

カエデ「またそんな格好して」

ミミコ「バイト代入ったから、原宿のお洋服

屋さん行ってきたの」

カエデ「早く脱いで、その服」

ミミコ「嫌だ」

カエデ「何言ってるの？ そんな派手な格好
しないでっついても言ってるでしょ！
貸しなさい」

カエデ、ハサミを持ってくる。

ミミコ「嫌だ。もう、好きなお洋服とお別れ
になるのは嫌だ！」

カエデ「早く脱ぎなさい！」

カエデ、ミミコの服を引っ張る。
服、破れる。

ミミコ「ああ」

カエデ「勉強しないさい！」

ミミコ「出ていく！」

ミミコ、自分の部屋に向かう。

カエデ「ミミコ、待ちなさい！」

服に着替えたミミコ、部屋から出てき
て、玄関へ向かう。

○同・玄関（夜）

玄関のドアが乱暴に閉まる。
残されたカエデ、溜息をつく。

○交番（夜）

キムラ、ほかの警察官に挨拶をして、
交番を後にする。

交番の外に出ると、ミミコがいる。

キムラ「あれ？ どうしたのその恰好」

ミミコ「へへ、キムラさん」

○キムラの家・リビング（夜）

キムラ、ソファに座っているミミコにお
茶を渡す。

キムラ「どうぞ」

ミミコ「ありがとう」

キムラ「もう、びっくりしたよ。仕事終わる
の待ってたの？」

ミミコ「うん」

キムラ「一人で？」

ミミコ「うん」

キムラ「サカキさんは？」

ミミコ「5時ぐらいに別れたよ」

キムラ「ミミコちゃんはどうしてたの？」

ミミコ「お母さんにお洋服のこと、怒られて、破られて、家出してきた。毎回新しいお洋服買ったら、お母さんに捨てられるの」

キムラ「そっか（泣き始める）」

ミミコ「待って、飛ばないで。話して」

キムラ「あのね、私もずっとミミコちゃんとサカキさんが着てたみたいなお洋服、大好きだったの」

ミミコ「わかる。この部屋、とっても可愛いもん。ここに住みたいくらい」

キムラ「そうでしょ？ これだって、これだって、これだって！ 高かったんだよ？

集めるのに5年かかったんだから」

ミミコ「すごい！ そりや高いよ。（ソファに寝転がり）こんなにこだわり抜かれてるんだから」

キムラ「だよね（ミミコのように寝転がる）」

二人、キムラの部屋を堪能する。

キムラ「ミミコちゃん、嫌になるまでここに居ていいからね」

ミミコ「本当？」

キムラ「うん。あと3年したら、強制的に大人になっちゃうんだし、今が暴れ時よ！」

ミミコ「なんでこんなに早く大人になっちゃうんだろう」

キムラ「それなー」

ミミコ「ふふふ」

キムラ「ミミコちゃん、何が好き？」

ミミコ「動物だったら、ウサギ。食べ物だったら、イチゴ」

キムラ、手を出す。

ミミコ「え？」

キムラ「お洋服、貸してみて」

キムラ、ミミコの洋服を縫っている。

キムラ「実はね、警察官になる前は、服飾の専門学校に行ってたの」

ミミコ「そうなの？ 専門学校楽しかった？
どんなお洋服作ったの？ 就職は大変だった？」

キムラ 「ふふ、興味あるんだ」

ミミコ 「まあね」

キムラ 「それで好きなお洋服作るんだ」

ミミコ 「そう！ よくわかったね」

キムラ 「うん。私がそうだったから」

ミミコ、キムラの表情を見て

ミミコ 「キムラさん、私とブランド作ろうよ」

キムラ 「私、公務員だよ？」

ミミコ 「公務員やめれば？」

ミミコ、キムラの手元で縫われている

イチゴとウサギのアップリケと縫った

箇所を見ている。

キムラ 「そんなの無理だよ。もういい年だし」

○竹下通り（早朝）

ミミコ、竹下通りに散乱するゴミを集

めている。

ミミコ 「なんでこんなに汚れてるの」

サカキ 「ミミコちゃん」

ミミコが振り返るとサカキがいる。

サカキ「なにしてるんですか？」

ミミコ「誰かと思った」

サカキ「着たくてこの服着てるわけじゃない
んですよ」

サカキ、悔しそうにスーツ姿をミミコ
に見せる。

ミミコ「いつもはそんな格好してるんだ」

サカキ「これは世を忍ぶ仮の姿」

ミミコ「忍ばなくても似合ってたのに」

サカキ「でもね、世のなかはそんなに寛容じ
やないんですよ。この21世紀になっても」

ミミコ「そうだよね。なんとかえもんもタイ

ムマシンも何も開発できてないしね」

サカキ「よく知ってるね、ミレニアム世代」

ミミコ「世代で区分するのは、大人の悪い癖
だね」

サカキ「ハハッ、そうですね。ミミコちゃん
には政治家になってほしいくらいですよ」

ミミコ「あんな真っ黒な人ばかりのところ
にいたら、純白の心が穢れちゃう」

サカキ「そうですね」

ミミコ「ほら、流した」

サカキ「ごめんごめん」

ミミコ「で、なにしてるの？ 原宿、あんまり来ないんじゃないのかなかった？」

サカキ「ミミコちゃんこそ」

ミミコ、言いたくなさそうにしている。

サカキ「実は、毎日、仕事前に竹下通りの清掃をしているんですよ」

ミミコ「まさか、竹下の掃除人？」

サカキ「た、た、竹下の、掃除人？」

ミミコ、スマートフォン画面を見せる。画面には、顔は写っていないが、スーツ姿のサカキがゴミ拾いをしている写真が映し出されている。

サカキ「なんか恥ずかしいね」

ミミコ「いつもありがとうございます！」

ミミコ、サカキに向かってお辞儀。

サカキ「そんな、そんな感謝されるようなことしてないですよ」

ミミコ「竹下の掃除人とは知らず、ご無礼を働き申し訳ございませんでした！」

サカキ「どうしたの、ミミコちゃん。なんか心がサワサワしてきます。むず痒い」

ミミコ「だって、竹下の掃除人って、原宿では神のような存在だよ？ 榊っていう字も神っぽいし、まさに神様だよ！」

サカキ「そんな神様だなんて」

ミミコ「神社建てたいね」

ミミコ、手を合わせて拝む。

サカキ「え、そんな」

サカキとミミコの後ろに、トコチャとメイチャ、サケチャが率いる新大久保サラムの集団がザッと並んでいる。

トコチャ「ひっ、パパ！」

ミミコ「新大久保サラム！」

メイチャ「なに？」

サカキ「トウコ！」

サケチャ「なんだって？」

トコチャ「撤収」

新大久保サラムの集団が、ザっと竹下

通りから去ろうとする。

ミミコ「待ちなさい！」

メイチャ「なに？」

ミミコ「原宿をこんなにしたのは、あんたたちね？」

メイチャ「そんな服着て恥ずかしくないの」

ミミコ「私はこのお洋服大好きなんだけど！」

サケチャ「あのダサイお洋服が大好きなんだ

って！」

新大久保サラム集団、笑う。

ミミコ「笑うな！ ベリキャンなき今、私が

また元の原宿を取り戻すの！」

メイチャ「どうやって？」

ミミコ「専門学校に通って、人脈を広げて、

自分のブランドを作るの！」

サケチャ「ハッ、何年かかるの？ そのおっ

さんが死ぬまでに実現するかわかんないじ

ゃん」

ミミコ「今の原宿だって、新大久保だって何

年もかけて街をつくってきたたくさんの人々が居たからこそできた街でしょ。何年かかっても私が立て直す！」

トコチャ「笑えるね」

サケチャ「私たちの力で原宿を殲滅し、復活できないようにするって決めちゃったもんねえ」

新大久保サラム集団「ねえ」

サカキ「トウコ！ 今すぐ謝りなさい！」

トコチャ「うっせえ、じじい！ お前は黙って、ママの仏壇に手を合わせとけ」

新大久保サラム集団、一斉に笑う。

トコチャ「行くよ」

新大久保サラム達、ゴミを蹴散らし、サカキとミミコに当たりながら、竹下通りを去る。

ミミコ、転倒してしまう。

サカキ、倒れているミミコに手を差し伸べる。

ミミコ、それを無視して、立ち上がる。

ミミコ「トコチャのお父さんだったの？」

サカキ「どうやらそうみたいだ」

ミミコ「原宿をつぶすつもりだったの？」

サカキ「え？」

ミミコ「ねえ、サカキ、神様やめちゃうの？」

サカキ「やめないよ。原宿を守るためにも、

竹下の掃除人にでも、神にでもなりますよ」

ミミコ「サカキ」

○交番（昼）

キムラ、ミミコの手のひらを手当てしている。

キムラ「もう、将来の社長になにするの」

ミミコ「そうよ。一国を揺るがすほどの財産を持ったとしても、新大久保のやつらには一銭たりとも渡さないから！」

サカキ「ミミコちゃん、一番なりたくない人

は誰？」

ミミコ「真っ黒い大人」

サカキ「じゃあ、その顔やめなさい」

ミミコ「どんな顔？」

ミミコ、鏡を取り出し、顔を見る。

ミミコ「うわ、眉間にシワ」

ミミコ、眉間のシワをこする。

キムラ「こすらない、こすらない」

ミミコ「だってえ」

キムラ「よしよし。ところで、サカキさん、

お仕事は？」

サカキ「原宿を愛する人間としても、一人の

親としても、この問題には立ち向かわなき

やいけませんから」

ミミコ「有休1週間取ったんだって」

キムラ「真面目に働いてたんですね」

サカキ「すべては原宿のためです」

キムラ「そっかあ。まずは、新大久保サラム

を倒さないかね」

ミミコ「警察官がそんなこと言ってもいいの」

キムラ「ダメだよねえ。でも、私にとっても

死活問題だからさ」

ミミコ「みんな帰ってきてくれないかなあ」

サカキ「それだ！」

ミミコ「え？」

サカキ「それだよ、それ。お店の人も今まで来ていた人も原宿が嫌いで、出ていったわけじゃないだろうし」

ミミコ「うまくいくと思う？ バックには、

悪の組織が絡んでるとか」

サカキ「そんなわけないよ、だって私、普通の会社員だし！」

キムラ「わかんないよ？ 新大久保サラムのリーダー、トコチャは、サカキさんの娘なんだもんねえ」

ミミコ「それがどうしたの」

サカキ「キムラさん！」

キムラ「警察のデータベースなめんなよ」

サカキ「昨日の身分証明書で気づかれたんですね」

ミミコ「なになに」

サカキ「私は、昔ムシヨに入っていたことが

あつたんです。今は、もうシヤバに出て働いていますが」

ミミコ「まさか、悪の組織の一員だったの？」

サカキ「ま、まあ、そうだったんだ。もちろん、今は足を洗ってるからね」

ミミコ「でも、トコチャは」

サカキ「まさかトウコが」

キムラ「裏で手を回してるかもよ。ね、さかしら組七代目」

サカキ「そんなわけないですよ！ トウコには言つてませんし」

ミミコ「じゃあ違うか」

○新大久保サラム拠点（昼）

トコチャ、物を蹴散らしている。

新大久保サラム集団、休めの姿勢でいる。

トコチャ「クソっ、なんでパパが」

サケチャ「本当にパパだったんだ」

メイチャ「ヤバイ、おっさんかと思った」

サケチャ「ウケる。私と同年くらいの子に
声をかけるやばいおじさん」

トコチャ「笑うな！」

メイチャ「ごめん、ごめん、そんな怒らない
だよ」

サケチャ「ほら、ハットグ食いな」

サケチャ、トコチャにハットグを渡す。
トコチャ「原宿にまだカルチャーが残ってい
たなんて、クソッ、あいつらまとめてぶっ
潰してやる」

トコチャ、ハットグをかじる。

メイチャ「でも、なんだか強そう。あいつら」
トコチャ「は？」

サケチャ「竹下の掃除人こと神と原宿の天使
が相手だぜ？」

サケチャ、スマートフォン画面をトコ
チャに見せる。

スマートフォン画面には、SNSのペ
ージがあり、ミミコが写っている。

サケチャ「フォロワー2万人越え、私たちな

んてコイツの足元に及ばねえよ」

トコチャ「クソ、あの人を呼ぶしかないか」

トコチャ、スマートフォンを取り出し、

電話をかけ始める。

メイチャ「我ら新大久保サラム！」

サケチャ「原宿をぶっ潰す！」

新大久保サラム集団、肩を組み、叫び

ながら飛び跳ね続ける。

新大久保サラム「おう！　おう！　おう！」

トコチャ「うっせえ、声が聞こえねえだろ！」

新大久保サラム「すみませんでした！」

○交番（夕方）

ミミコ、スマートフォンを触っている。

ミミコ「せめてあいつらの目的が分かればな」

キムラ「確かに」

ミミコ「聞けないの？　お父さん」

サカキ「うーん、難しい年頃なんだよ」

スマートフォンを触る手を止める。

ミミコ「ん？」

ミミコのスマートフォン画面に、

『決闘!』の文字が見える。

サカキ「どうしたの?」

ミミコ「なんかSNSのDMに」

ミミコ、スマートフォン画面をサカキ
とキムラに見せる。

キムラ「Oh、知っちゃったよ」

サカキ「誰から?」

ミミコ「新大久保サラムのトコチャ」

サカキ「トウコか」

ミミコ「4月1日、大久保公園で、だって」

キムラ「嘘じゃない?」

ミミコ「春休みでよかったあ」

サカキ「祝日でよかったあ」

○新宿文化総本部（夜）

トコチャ、土下座している。その後ろ
でメイチャとサケチャが、土下座して
いる。

トコチャ「シオリ様! 本日完了予定だった

原宿完全制圧ですが、原宿の天使と竹下の掃除人の手によって、阻まれました」

トコチャの前に、シオリ（29）が座っている。

シオリ「お父さん、竹下の掃除人らしいじゃん？」

トコチャ「私の至らぬところがあり、申し訳ございません」

シオリ「謝るなら、結果出しな？」

トコチャ「シオリ様に与えられたミッションを完了させるため、新宿文化総本部のお力をお貸しいただけませんか？ どうか！」

新大久保サラム「よろしくお願いいたします」

シオリ「（溜息）仕方がないわね」

トコチャ「本当ですか？」

シオリ、合図をする。

チョウウコ（37）とゲンジ（30）、ホワイトボードをガラガラと持っている。

シオリ「新宿文化総本部からはじまり、全10か所の支部を立ち上げるまで、約9年かかった。私たちの願いはただ一つ」

全員「新宿区を素敵なかルチャーの街へ！」
シオリ「そう、新宿区から新しい時代の多種多様な文化を築き上げるの。原宿さえなければ、新宿区が一番なのに！ ねえ、知ってる？ 4月1日で新宿文化総本部は10年目を迎えるの」

トコチャ「はい、存じております」

シオリ「祝いたいのに！ 私は！ わかるですよ？」

トコチャ「はい」

シオリ「あなたに宴の準備をさせてあげる」
チョウコ「私たちが喜ばせてちょうだいよ」
トコチャ「はい」

ゲンジ「打ち上げは、僕の経営するホストクラブでどうかかな？」

シオリ「何言ってるの、相手は未成年よ」
ゲンジ「大人っぽいからわからなかった」

チヨウコ「ゲンジ、私があなをナンバーワ

ンにしてあげたのよ？ わかってる？」

ゲンジ「わかってますよ、チヨウコさん」

メイチャ「トコチャ、どうする」

サケチャ「しくじったら、さらし首になるよ」

シオリ「そう、さらし首、SNSであんたら

の加工前の写真をばらまいてやるからな！」

トコチャ、震えている。

トコチャ「わかりました。やらせていただき

ます！」

○交番（夜）

ミミコとサカキ、キムラ、地図を出し
ている。

ミミコ「違う違うそうじゃない」

キムラ「じゃあ、どうなの！」

ミミコ「私はこっちを通りたいの！」

キムラ「そこでの、デモは禁止されておりま

す」

ミミコ「出た、警察」

サカキ「じゃあ、こっちはどうですか？」

ミミコ「そっちは嫌って言ったじゃん」

キムラ「そっちの道なら大丈夫です」

サカキ「じゃあ、こっちにしましょう、ミミコちゃん」

ミミコ「嫌。可愛くない」

キムラ「でも、ほかは遠回りになっちゃうよ」

ミミコ「それでも嫌」

サカキ「ミミコちゃん、聞いてください。ミ

ミコちゃんの案に、私は大賛成です」

キムラ「私もよ。私人としてね」

サカキ「竹下通りから大久保公園まで歩いてデモをするなら、この道はミミコちゃんが言う道の次にいいコースだと思います。この選択を逃すと、後は細くて狭い路地だけです。広くて、人目に付いて、デモとして効果のあるB案だと考えてみてください」

ミミコ、ふくれっ面をしている。

サカキ「ほら、ミミコちゃんが得意なSNS拡散大作戦次第でB案がA案にもなるんで

す」

キムラ「でも、デメリットもある。この道は、
ミミコちゃんが言っていたような派手なこ
とできないの」

ミミコ、少し考えて

ミミコ「じゃあ、竹下通りから右へ! そう
した方がいいんでしょ? B案をA案にす
るんでしょ。みんなで」

サカキとキムラ、拍手している。

ミミコ「やるからには、派手に可愛くいくか
ら、覚悟しといてね!」

○大久保公園（昼）

新大久保サラムと新宿文化総本部、ミ
ミコ達を待っている。

シオリ「遅い! ちゃんと決闘状は送ったの」
トコチャ「学校の宿題を忘れたことはありま
せんから」

シオリ「そう」

遠くのほうから音楽が聞こえる。

ミミコ、拡声器を持って、歌いながらやってくる。

その後ろで、サカキ、ミミコと同じように踊りながら歩いてくる。

トコチャ「う、パパ」

シオリ「お父さん、やるわね」

サカキとミミコの後ろから、キムラとたくさんの人々が付いてきている。

シオリ「なにあの大群」

チョウコ「眩しいっ」

ミミコの手握られている美しい装飾を施された旗が、光に反射して、ミミコ達が輝いているように見える。

シオリ達、眩しそうにしている。

トコチャ「遅かったじゃない! 5分前行動、習わなかった?」

ミミコ「ごめんごめん、待ったんだね」

トコチャ達とミミコ達、お互いに距離を取って向かい合う。

トコチャ「普通の待ち合わせじゃないんだ

よ? わかってんの?」

ミミコ「わかってる、わかってる」

トコチャ「むかつく」

シオリ「トコチャ、始めなさい」

トコチャ「はい」

ミミコ「ねえ、決闘って何するの?」

トコチャ「それ、今から説明するの!」

ミミコ「わかったけど、ちよつと近づかな

い? 決闘始める前に、喉やられそう!」

トコチャ「わかった」

ミミコ達とトコチャ達、お互いに10

歩、歩み寄る。

トコチャ「今から、決闘を申し込む」

ミミコ「その前に、この服見て! 作ったの。

私たちとキムラさんで!」

ミミコとサカキ、決めポーズ。

○(回想) 交番(昼)

デザイン画を描くミミコとサカキ、キムラ。

○（回想開けて）大久保公園（昼）

ミミコ「どうだ！ 可愛いだろう！ ゆくゆくはブランドを立ち上げるつもりなの！」

トコチャ「へえ、やるじゃん」

シオリ「ちよつと」

トコチャ「すみませんでした！」

ミミコ「ひっ、誰」

シオリ「あんた、原宿の天使？」

ミミコ「そうだけど」

シオリ「え、実物めっちゃ可愛いんですけど、え、加工してないんすか？」

シオリ、スマートフォンを落としそうな勢いで、スクロールし、ミミコの顔とスマートフォンを見比べている。

ミミコ「加工なんてするわけないじゃん！」

ミミコはミミコなんだから」

シオリ「これが、透明感！ どんなに加工しても出せない心の純真さ！ フォローしてます！ 写真撮らせてもらってもいいですか？」

ミミコ「え、いいけど」

シオリ、ミミコと写真を撮る。

シオリ「ありがとうございます！ わー、うれしい」

トコチャ「シオリさん」

シオリ「#原宿の天使 #可愛すぎ #家宝にする」

トコチャ「シオリさん！」

シオリ「あ、ごめん。私ども、新宿文化総本部は、日本の *Kawaii* 文化発祥の地、原宿を制圧し、新宿区を新たな時代の多種多様な文化の発祥地とすることが、目標である！」

ミミコ「そんなことのために、原宿をあんなにしたの？ほんと最低ね！」

シオリ「最低？ 原宿が悪いの！ 世界の注目の的を独り占めしやがって、新宿なんてなんて言われてるか知ってる？」

ミミコ「なに」

シオリ「夜の街よ。危険なのよ」

夜の街に属する人達が、一斉に前に

出てきて、ミミコを取り囲む。

ミミコ「なに、なに、なに」

ミミコにじりじりと近寄ってくる夜の街の人達。

シオリ、おびえるミミコの写真を撮りまくっている。

ミミコ「真顔で近寄ってこないでえ！」

サカキ「ミミコちゃんに手を出すな」

サカキ、大声で叫ぶ。

夜の街の人達、サカキの方を向く。

サカキ「お前ら、なめてたら痛い目見るぜ？」

サカキ、眼鏡を外し、睨みを利かせる。

夜の街の人達、逃げ腰になり、シオリの後ろに隠れる。

シオリ「あんた、何者？」

サカキ「さかしら組、七代目組長、サカキだ

よ」

後ろから、強面の人達がざっと現れる。

シオリ「ひっ、ひい、悪の組織がフワフワ激

カワ服を着てるなんて、怖すぎる！」

シオリ達、恐れおののく。

シオリ「逃げるわよ！」

シオリ達、逃げ出す。

トコチャ、ミミコ達に背を向け、シオリ達を追う。

サカキ「トウコ！」

トコチャ、立ち止まる。

サカキ「晩御飯までに帰ってくるんだよ」

トコチャ、去る。

ミミコ「決闘、いつするんだろう」

サカキ「終わったんだよ」

ミミコ「ええええええええ！」

キムラ「あんなに決闘の練習したのにね」

ミミコ「せっかく披露できると思ったのに」

サカキ「そうだね」

○（回想）代々木公園（昼）

サカキ、息を荒くして、その場にへたり込む。

ミミコ、音楽を止めて

ミミコ「休憩する？」

サカキ「水だけ」

サカキ、水を飲む。

ミミコ「さつきからそればかりじゃん」

サカキ「ミミコちゃん、音楽お願いします」

ミミコ、音楽をかける。(きやりーぱ

みゅばみゅ／原宿いやほい)

ミミコとサカキ、アイドルのように歌
って踊っている。

サカキ、しばらくしてバテて、また水
を飲み、踊りの練習をまだまだ続ける。

キムラ、自転車に乗ってやってきて

キムラ「ミミコちゃん、サカキさん」

ミミコ「キムラさん！」

サカキ「キムラさん、パトロールですか？」

キムラ「はい。決闘の練習してるって言うか
ら、見に来たら、ふふふ、これね」

サカキ「久しぶりにいい汗かいてます」

キムラ「春だからって油断しないでね。はい」

キムラ、スポーツドリンクを二人に渡

す。

キムラ「じゃ、パトロールに戻ります」

キムラ、警察官らしく去っていく。

少しして、戻ってきて

キムラ「あ、あとでアトリエに来て。じゃ」

キムラ、去っていく。

サカキ「アトリエ？」

ミミコ「うん」

○キムラの家（昼）

ミミコとサカキ、入ってくる。

サカキ「お邪魔します」

ミミコ「お邪魔しまーす」

キムラ「待ってたよ」

サカキ「私なんかがお部屋に」

ミミコ「わああ、可愛いい！」

サカキ「え？」

キムラの部屋には、トルソーが並べら

れ、三着の洋服が飾られている。

ミミコ「キムラさん、天才！ 可愛すぎる！」

ミミコ、洋服に抱き着く。

キムラ「ふふ、いいでしょ」

ミミコ「うん！ 最高！」

サカキ「これ、全部、キムラさんが？ 可愛すぎる！」

サカキ、洋服に抱き着く。

キムラ「みんなで描いたデザイン画を形にしてみました」

サカキ「キムラさん天才すぎるよ！ ショー

ウインドウに並ぶ激かわお洋服たちが見え

たよ！」

キムラ「ふふふ」

○（回想あけて）大久保公園（昼）

ミミコ、スピーカーから音楽を流し

ミミコ「サカキ、お披露目よ」

サカキ「うん」

ミミコとサカキ、アイドルのように歌い踊る。

一曲歌い終わるころには、たくさんの

見物人たちにミミコ達は取り囲まれて
いる。見物人たち「アンコール！ ア
ンコール！」と叫んでいる。

ミミコ「その前に聞いてください」

見物人たち、拍手。

ミミコ「私たち、好きだった原宿を取り戻
したいんです。今は、人が寄り付かなくな
ってしまったけど、元の最先端のカワイイ
が集まる街に戻りたい。皆様のお力を貸し
てください」

ミミコ、頭を下げる。

サカキ、ミミコの肩を叩き

サカキ「私たちは、廃れた原宿で同じ日に、
ベリキャンの、いやベリーキャンドルの閉
店を知りました。流行が日々古くなって新
しいものがたくさん入ってくる街で、私た
ちにとって大切なお洋服屋さんがなくなり
ました。ちっぽけなことかと思いますが、
私たちにとっては、大きなことなんです。
今日は、原宿を取り戻すために竹下通りか

らここまで歩いてきました。

すべては、新たな流行を追い求めるインフルエンサーからの決闘状が始まりでしたが、こうして私たちの思いを形にすることができて、本当に感無量です」

警察官達がやってきて

警察官「君たち！　そこで何をしている！」

見物人たちざわつき、ちらほらと帰りに出す人が出てくる。

ミミコ「どうしよう」

キムラ、警察官たちの後ろから現れて

キムラ「待ってください！」

警察官「誰だ君は、変な格好して」

キムラ「変な格好じゃありません！　人の好みを蔑むなんて、それでも警察官ですか！」

キムラ、警察手帳とデモの許可証を出す。

キムラ「新宿区の許可も取っています」

警察官「そうか、近隣の住人の迷惑にならないように」

警察官達、去っていく。

ミミコ「キムラさん、ありがとう！」

キムラ「変な格好って言われちゃったよ。う

まく着こなせなかったみたい。ごめんね」

ミミコ「ううん、そんなことない。とつても

似合ってる」

サカキ「素敵ですよ」

キムラ、帰り出す見物人たちに

キムラ「ちよつと待って、皆さん！ 竹下通

りまで、ここにいる原宿の天使と原宿の神

と、一緒に練り歩きますか？ デモの許

可もちゃんと取ってます！」

キムラ、デモの許可証を見せる。

ミミコ「みんな一緒に来てくれるかなー？」

全員「いいともー！」

ミミコ「タモさんってすごいんだね」

キムラ「ね」

○道路（昼）

デモ行進をしている先頭には、ミミコ

とサカキ、キムラがいる。

ミミコとサカキ、楽しそうに歌っている。デモ行進集団、笑顔で歩いていく。

○竹下通り（夕方）

ミミコ、デモについてきた人達に頭を下げる。

ミミコ「本当に、本当に、ありがとうございます！ 今日撮った写真や動画は、SNSにどんどんあげて、拡散してってください！ ハッシュタグ！ えーと」

ミミコ、スマートフォンを操作して

ミミコ「#竹下通りから右へ」

○交番（朝）

キムラ、業務にあたっている。

ミミコ、駆け込んでくる。

ミミコ「キムラさん、おはよう！ ちょっと見て見て！ バズっちゃったんですけど」
キムラ「え」

ミミコ「ミミコたちのお洋服、買いたい人からDMいっぱい来てるんですけど!」

キムラ「え?」

キムラ、思考が追い付かない。

キムラ「え、嘘! 嘘だ! え、本当?」

ミミコ「本当だよ! 嘘じゃない! キムラ

さん! お洋服作ろう!」

キムラ「うん」

キムラ、退職願を引き出しから出し、

机の上に出す。

ミミコ「退職願?」

キムラ「行くよ!」

ミミコ「どこに」

キムラ「アトリエ!」

ミミコ「キムラさんの家!」

キムラ、ミミコの腕を引っ張り、外に

飛び出していく。

○サカキの家・リビング（夜）

トコチャ、テレビを見ている。

玄関が開く音が聞こえる。

トコチャ、テレビを消す。

サカキ、部屋に入ってきて

サカキ「ただいま」

トコチャ「私、新大久保サラム抜けてきた」

サカキ「そうか」

サカキ、仏壇に手を合わせる。

サカキ「パパ、トウコが着てた服、着てみた

いな」

トコチャ「え」

サカキ「別にみんな悪くないんだよ。自分が信じるものだけしか見ないなんてもつたいないってことだよ。トウコも新大久保サラムのみんなも一番になりたすぎる一心であるなことをしてしまったんだろ。いいんだよ。自分だけの一番を持っていれば、人に認められなくてもいい、人にわかってもらわなくてもいいんだ」

サカキ、トコチャの頭を撫でて、キッ
チンへ向かう。

トコチャ「サイズ入るかな」

サカキ「え？」

トコチャ「私の服、パパにはちっさいよ」

サカキ「一緒に買いに行こう。トウコが嫌じやなかったらだけど」

トコチャ「嫌かどうかはまだわかんないけど。しないよりした方がいいんでしょ。ミミコみたいに」

○同・リビング（朝）

新聞を読んでいるサカキ。

トコチャ、ひよこつと扉から顔を出し

トコチャ「パパ、行くよ」

サカキ、新聞を置く。新聞には、自称元新宿文化総本部総長シオリの逮捕についての小見出しがある。

○ベリーキャンデルの前（昼）

サカキとトコチャ、ベリーキャンデルの前にやってくる。

トコチャ「パパの好きだったブランド」

サカキ「うん」

トコチャ「私たちが潰したんだよ」

サカキ「うん」

トコチャ「新大久保サラムに入ったのもパパ

が原宿好きなの知ってたからだし」

サカキ「そうかそうか」

トコチャ「ママが死んでから寂しかったから」

サカキ「ごめん」

トコチャ「でも、これからは違うもんね。お

互いを理解し合って生きていく」

サカキ「うん」

威勢のいい声が聞こえてくる。

ミミコの声「竹下ドロワのお洋服! 見てい

きませんかあ」

サカキ、ミミコの声のする方へ向かう。

トコチャ「パパ?」

○竹下通り(昼)

ミミコとキムラ、竹下通りに面した店

で通行人に呼び掛けている。

店名は「竹下ドロワ」

サカキ「ミミコちゃん、キムラさん！」

ミミコ、とキムラ、サカキに気が付く。

ミミコ「サカキさん、そのお洋服！」

サカキ、新大久保サラムが着ていたような服を着ている。

ミミコ「いいじゃん！ 次のコレクションに取り入れようかな」

トコチャ「嫌ってたんじゃないの」

ミミコ「と、トコチャ？」

トコチャ、ミミコたちが着ているような服を着ている。

トコチャ「なに？」

ミミコ「似合ってるじゃん！ 可愛い！」

トコチャ「お父さんに選んでもらったんだ」

ミミコ「うちのお洋服、見て行って。友達割で安くするよ」

トコチャ「友達？」

ミミコ「ほらほら、入って行って！」

トコチャ、ミミコに押されて店内へ

キムラ「いいですね」

サカキ「ええ」

キムラ「サカキさんのお洋服」

サカキ「トウコが選んでくれたんです」

竹下ドロワのなかで、ミミコとトコチャがわいわいと服を選んでいる。

キムラ「私たち、いろんな人が着たいって思えるようなお洋服を作っていくつもりなんです。自分たちが好きなものだけじゃなくて、どんな人でも着られるような服を」

サカキ「これから私は、竹下ドロワの常連になるわけですね」

キムラ「サカキさんがおじいちゃんになっても着られるお洋服をつてミミコちゃん、言っていました」

サカキ「それはうれしいな」

ミミコ、店内からサカキに

ミミコ「早く来て！ サカキにもお洋服選び

たい！」

サカキ「はーい」

サカキ、ミミコの元に走っていく。

キムラ「あ、デザイン画も見てください！」

キムラ、サカキを追いかけて店内に入る。

カメラ引いて、竹下ドロワが遠くなくなっていく。

店内では試着を終えたトコチャ、出てくる。

ミミコ、「いいね！ こっちはどう？」
という感じでトコチャと話している。

サカキ、いろんな服を体に当てている。
キムラ、ほかのお客さんの接客をしている。

カメラの視点は、だんだんと賑わいを
取り戻した竹下通りへ。

【終】